（クリスマス礼拝）

「救い主を受け取る」

（ルカ２：２２～３５）

2019.12.22

教会などで行われる降誕劇、ページェントには、マリヤやヨセフをはじめ、天使や羊飼い、博士たちなどが登場いたします。ところがほとんどの場合、今日の箇所に出てきますシメオンとアンナは登場いたしません。羊飼いや博士たちが主イエスに会いに行くシーンに比べますと、老人であるシメオンやアンナの物語はちょっと面白みに欠けるのかもしれません。

しかし、ルカによる福音書は、年老いたシメオンとアンナの二人を、クリスマス物語において欠くことのできない、大切な出来事として書き残しています。興味深いことに、著者ルカは１～２章の長いクリスマス物語を、ザカリヤとエリサベツという老夫婦の物語から始め、最後は再びシメオンとアンナの二人の老人の物語で閉じております。クリスマスは決して子どもや若い人たちのためだけではない。むしろ、クリスマスの本当の恵みと喜びを知っているのは、この老人たちである、とルカは言っているかのようであります。

今朝、シメオンが味わったクリスマスの喜びを、私たちも共に味わいたいと思います。クリスマスは、み使いが羊飼いたちに告げたように、**「すべての民に与えられる大きな喜び」**（ルカ２：１０）であって、大人も子どもも、そして老人たちにも与えられている喜びであります。では、シメオンが味わったクリスマスの喜びとはどのようなものだったのでしょうか。

エルサレムの神殿近くに住んでおりましたシメオンは、正しく信仰の深い人で、**「聖霊が彼に宿っていた」**と２５節で紹介されています。いつも神殿に行って礼拝し、祈りをささげる生活をしていた人であります。年齢はハッキリと書かれていないものの、かなり年を取っていたようであります。３６節からは、アンナという８４才にもなるやもめの女性が登場いたします。

この二人に共通することは、ずいぶんと年をとっていたであろうということと、もう一つは、やがて来られる救い主を長く待ち望んでいたということでありました。シメオンについては、２５節に**「イスラエルの慰められるのを待ち望んでいた」**とあります。**「慰められる」**とは「救われる」ということです。イスラエルの民が救われることをずっと待ち望んでいた。具体的には、預言者を通して約束されていた救い主が来られるのをずっと待っていたということです。

当時の民衆の中には、シメオンのように救い主が来るのをずっと待っている人は多くはありませんでした。このときも、救い主がついに誕生されたというのに、国中の人々がお祝いに駆けつけたということはなく、逆にほとんどの人々は無関心でした。みんな自分の生活のことで忙しく、救い主を待ち望むどころではなかった。

一つのことを諦めずに待ち望み続けるということは大変なことであります。待っても待

っても何も変わらず、一向に光が見えて来ないとき、私たちは絶望してしまいそうになる。皆さんも、苦しみがあまりにも長く続くために、望みを失いそうになることがあるのではないでしょうか。たとえ信仰者であっても、私たちは弱い人間に過ぎないため、諦めそうになるのは当然のことであります。「どんなに待っても無駄ではないか」「神は私たちを見捨てられたのではないか」と思えてしまう。かつてナチス・ドイツの時代、捕虜収容所に送られ、ガス室で殺される恐怖に怯えながら見事生還したフランクルは、精神科医として、その体験をもとにして、極限状態に置かれた人間がいかにして生き続けることができたかを本に書いております。同じ厳しい状況に置かれながらも、最後まで生き延びた人もあれば、力尽きて死んでいった人たちもいた。その明暗を分けたのは決して体力の違いではなく、その人が希望を持っていたか否かであるとフランクルは言います。「この戦争はいつかは必ず終わり、妻子に再び会える」という希望であったり、「戦争が終わったら、やりかけの仕事をしよう」という希望であったり。収容所の中では、いずれも実現不可能と思えた。それでも諦めることなく、そのような希望を持ち続けた人のみが、生きて終戦を迎えることができたと言います。たとえ苦しみの中に置かれていたとしても、自分が生きていることに意味を見いだせているとき、人は極限状況でも生きていけるとフランクルは書き残しています。

シメオンとアンナが、長い間、救い主が来られるのを待ち続けられたのは、「老人は暇で時間があるから」というのでは決してない。二人が、年老いてもなお、神の約束の言葉に希望を持ち続けていたからであります。シメオンには、神さまから一つの約束と希望が与えられておりました。26節に、**「主のつかわす救主に会うまでは死ぬことはないと、聖霊の示しを受けていた」**とあります。死ぬ前に必ず神から遣わされた救い主に出会うであろうという約束による希望が与えられていた。その約束がなかなか実現しない中、「しかし神は、私にこのように約束してくださったのだ！」とシメオンは希望を抱き続けておりました。その約束を信じているからこそ、「もしかしたら今日、その救い主とお会いするかもしれない」と思いつつ、まるで見張り役をするように、毎日宮に出入りしていたようであります。

この日もいつものように、シメオンは礼拝をささげるために主の宮へと上っていきました。ただこの日は、**「御霊に感じて宮にはいった」**（27）とあります。神の霊に導かれ、いつもとは違う何かを感じながら、胸騒ぎがする思いで宮に入っていった。するとそこへ、マリヤとヨセフが幼子イエスを抱いて入ってきました。モーセの律法に従い、生まれた子を主にささげる、いわゆる献児式を行うためでありました。そのため、ベツレヘムから8キロほど離れたエルサレムの神殿へとやってきた。

この3人の姿を見たとき、シメオンは、「この幼子こそ、ずっと待ち望んでいた救い主だ」と確信した。マリヤやヨセフが「この幼子は救い主ですよ」とふれ回りながら歩いていたわけではないでありましょう。あるいは宗教画にあるように、幼子イエスが特別な光を放っ

ていたわけでもない。貧しい夫婦に抱かれたごく普通の赤ちゃんであります。そのために、神殿にいた他の多くの人々は、この幼子に気づかず、気にも留めない。すれ違っていく多くの人の中で、神の声を聞き続けていたシメオンは「この幼子こそ、待ち望んでいた救い主だ！」と気づいた。主の霊がシメオンに語ってくださったのでしょう。約束の救い主についに出会った。

そこへアンナも近づいてきて、彼女もこの幼子が救い主メシヤだと確信した。救い主にお会いするのをずっと待ち続けていたこの二人が、ついにメシヤに出会った。このシメオンとアンナの救い主との出会いは、羊飼いや博士たちのそれとは少し違っています。大切なところで違っていると言ってもよい。今日の箇所の直前に書かれています羊飼いたちの場合、彼らが夜ベツレヘムの野原で羊の群れの番をしていたとき、突然み使いが現れて、「ベツレヘムの町で救い主が生まれた」と告げた。そこで羊飼いたちは羊を野に残し、救い主に会うためにベツレヘムの町へと降って行きました。東の国の博士たちに至っては、不思議に輝く星の導きに従い、自分たちの国を離れて、何千キロという道のりを旅して、やっとのことでベツレヘムにやってきた。羊飼いたちも博士たちも、特別な導きに従い、自分たちの足でベツレヘムにいる救い主に会いに出かけています。ところが、このシメオンとアンナの場合は反対で、主イエスのほうが小さな旅をして、ベツレヘムからエルサレムへ、彼らのところにやって来てくださった。恐らくそうでなければ、この二人の老人が救い主に会うことなど出来なかったでありましょう。年を取りますと、思いはあっても、もう遠くまで旅をすることなど出来ないものであります。私の母が近くのシオンの園に入所して2年が過ぎました。ここから歩いてわずか数分のところにいるものの、日曜日の礼拝に連れてきてあげることができない。礼拝を何よりも喜びとしていた人が、礼拝に集うことができない。そういう悲しみがあります。老いるというのはなかなか大変なもので、思いはあっても、もう体が言うことを聞かなくなってしまう。この当時は、今の時代のように自家用車もタクシーも、バスや電車もあるわけではない。どこまでも自分の足で歩いて行かなければならないとなりますと、わずか8キロのベツレヘムとエルサレムの道のりも、老いたシメオンやアンナにとっては不可能な距離であったでありましょう。そういう自分の足で遠くへ行くことが出来ない人の出来ることは、向こうから来てくれるのを待つだけであります。

そのようなシメオンとアンナのところに、主イエスのほうが訪れてくださった。神の子救い主が、父なる神のもとから人間の世界へと降りて来てくださったというだけでなく、自分たちが住むエルサレムにまで来てくださった。会いたくても自分からは行けない彼らのところに、救い主のほうが訪ねてくださいました。著者ルカは、ここにクリスマスの本当の意味を見い出していたのではないでしょうか。クリスマスの出来事は、私たちが神のもとを訪れるよりも、神が私たちのもとに訪ねて来てくださった恵みの出来事である、ということであります。自分からはとても神のもと

に近づくことができない罪人たちのために、自らを小さく低くして、神のほうから私たちのところへと来てくださった。

シメオンは母マリヤにお願いして、幼子イエスをその腕に抱かせてもらいます。赤ちゃんとはいえ、足腰の弱った老人が赤ちゃんを抱くというのは大変なことであります。元気な人ならば、自分でちゃんと赤ちゃんを持ち上げ、その腕に抱くことができるでありましょう。しかし年をとりますと、まだ首も据わっていない人様の赤ちゃんに万一のことがあったらと慎重になります。私などは、まだ首も据わっていない乳児を抱くなんて、「どうぞ」と言われても、「いやいや、結構です」と言いたくなります―何かあったら恐い。このシメオンはなかなかのチャレンジャーで、28節には**「シメオンは幼な子を腕に抱き」**とあります。「いや、私はとても抱けない」と言ったのではなく、おそらく、むしろ「私にも抱かせてください」とマリヤにお願いしたのでしょう。この**「抱く」**という言葉は、「受け取る」「受け入れる」という意味のギリシャ語の言葉です。すなわち、母親のほうが幼子を差し出してくれないと受け取ることは出来ない。また、**「腕」**という単語はギリシャ語原文では複数形となっています。ですから、ここは、原文を正確に訳すと、「シメオンは二つの腕の中に、みどり子を受けとった」という表現です。イメージしてみますと、最初から赤ちゃんを抱く腕の形を作っておいて、そこに赤ちゃんを受け取った、という感じです。慣れてない私のような場合は、自分の方からもらいにいくなんて恐くて出来ない。そこで落としたら自分の責任ですから、ギリギリまでお母さんの責任にしてもらって、お母さんに「待っていますから、ここに赤ちゃんをください」とお願いする。シメオンの場合そうだったでありましょう。もらいにいくのではなく、お母さんから差し出してもらって、形を作っていて「どうぞ、ここに抱かせてください」。

まさに、シメオンが待ち構えている腕の中に、救い主が向こうから来てくださった。母マリヤの腕から、自分のこの弱々しい細い腕の中に、幼子イエスを受け取りました。折り曲げた腕の中に幼子イエスを受け止めたとき、シメオンはどんなに感動したでありましょう。ずっと待ち続けた救い主が、今ココに、しかも私のこの腕の中に来てくださった。シメオンが救い主に会えるように、救い主自らわざわざエルサレムまで来てくださり、シメオンでも抱けるように、受け取れるように、大きな神さまが小さな赤子となって来てくださった。

シメオンは神さまに向かって感謝と賛美をささげます。これまで、26節にありますように、**「主のつかわす救主に会うまでは死ぬことはない」**との約束をもらっていたシメオンでした。その彼が、ついに救い主にお会いしたとき、29節、**「主よ、今こそ、あなたはみ言葉のとおりにこの僕を安らかに去らせてください」**と言った。約束が実現した今、安心してこの世を去ることができる、もういつ死んでもいい、とシメオンは思った。このように言える人は何と幸いなことでしょうか。年を重ねた者たちの大きな関心の一つは、いかにして安らかに死ねるかということでありましょ

う。死を前にした人々を苦しめるのは、心に平安がなく、「まだ死にたくない」と思っていることです。そういうとき、多くの人は、「果たして自分の人生に意味があったのか」と問い直すといいます。このことが自ら肯定できるとき、人は安らかに死を迎えることできる。

シメオンの場合、幼子イエスを抱いたとき、「これで安心して死ねる！」と言った。その理由を続く30節で、「**わたしの目が今あなたの救を見たのですから**」と言います。シメオンはまだ、幼子イエスしか見ていません。神がこの幼子をとおしてどのようにして人間を救ってくださるのかはまだ見ていない。しかし、この幼子イエスと出会ったときに、神の救いを見たと言った。それは「このイエスこそ、神が遣わされた救い主」という信仰告白です。「**見た**」と言っても、見えないものを見たのであり、それは「信じた」ということですね。信じる者たちだけに見えてくる神のみわざがあります。この幼子によって神の救いがなったと信じた。

そのとき、「私はもう、いつ死んでも大丈夫！」と言うことができました。なぜでしょうか、それはたとえ今、私が死んだとしても、天の父なる神がこの私を迎え入れてくださる、と信じることができたからであります。天の神が、今度はこの私をその両腕でしっかりと抱き留めてくださる。救い主を与えてくださった神は、この私を確かにその腕の中に受け取ってくださる。それゆえ、「私は平安のうちに死ぬことができる！」と言うことができた。

シメオンは、「**わたしの目が今あなたの救を見た**」（30）と言いながらも、この幼子がどのようにして実際に罪人たちを救うのか、そのことを見ることはできませんでした。けれども私たちは、そのシメオンが実際には見ることができなかった、幼子イエスによる神の救いのわざを見せていただいた者たちであります。この幼子イエスはやがて、私たちの罪のために十字架にかかってくださった。私たちの存在そのものを受け止め、私たちの罪をその身に背負って十字架にかかってくださった。その十字架の姿に、私たちも、「わたしの目が今あなたの救を見た」と言うことができる。

クリスマスは、神が私たちに与えてくださったプレゼント、御子イエスというプレゼントをみんなが受け取るときであります。この救い主が、私たちのところにも来てくださったからです。クリスマスは、神が私たち一人ひとりに対して、「さあ、この救い主を受け取りなさい」と差し出しておられる、恵みのときであります。ベツレヘムの町に生まれ、私たちのために十字架で死なれたイエスを「私の救い主」として受け入れなさい、と呼びかけております。私たちはそれに、どう答えるでしょうか？

私たちはふと、自分には救い主を迎え入れる資格などあるのだろうか、という思いが心によぎることがあります。こんな私は、救い主を受け取るにはふさわしくない、そんな資格などない、と受け取める手を引っ込めてしまいそうになる。ずっとローマ人への手紙を礼拝でお話してきました。信仰とは、神さまが私たちに向かって差し出しておられる恵みを受

け取るこの手のことだと言いました。その手を、「いいえ、そんな資格は私にはありません」と引っ込めてしまいそうになる。「さあ、受取りなさい」と神が差し出しておられるのに、私の手の弱さ、力のなさ、信仰のなさにこだわって、その手を引っ込めそうになる。しかし、この救い主は、薄汚れた飼い葉桶の中に来てくださり、年老いた弱々しいシメオンの腕の中にさえも来てくださったお方です。そのお方が、私たちの硬くこわばった心、醜い心の中にも来てくださいます。だからこそ、どんな人も、救い主を受け取ることができる。この後、聖餐式を行いますが、私たちに差し出される杯は、「あなたも私を受け取りなさい」という主イエスの呼びかけであります。この幼子を迎え入れることによって、今ここで、安心して生き、安心して死んで行くことができる。なぜなら天の神が、この私たちをその腕に抱いていてくださるからであります。今日ここにおられる皆さん、一人ひとり、一人残らず、どうぞ主イエスを抱いてお帰りください。そのために主は私たちのところに来られたのです。

お祈りをいたします。

天の父なる神さま、神が人となってこの世に降り、私たち罪人のところにも宿ってくださるクリスマスの恵みを覚えて感謝をいたします。資格のない者たちばかりが集まってまいりました。けれども、「私には資格がありません」と手を引っ込めるのではなくて、そのために来てくださったあなたの恵みに感謝しながら、「あなたこそ私の救い主」と告白し、ひれ伏します。どうぞ、私たちの心の中に、私たちの家庭の中に、あなたが真の主として、神としてお宿りくださいますようにお願いいたします。クリスマスの恵みがお一人おひとりの中にありますように。

このあとの洗礼式、聖餐式を祝福してください。

しばらく教会から離れている方々を覚えますが、どうぞ神さまのもとへお返しくださいますようにお願いいたします。

主イエス・キリストのお名前によってお祈りをいたします。アーメン。

（仙台南光沢教会牧師　佐藤信人）